

山首上人さまご講演

供く養よう讚さん歎だんの者もの

施ほどこし合あい



ハーブ「ヒソップ」

あなたも私も仏さまです

## 供養讃歎の者

お互いに長所をほめ合うことは、一番大きな供養です。直ちによい報いがくるといのが、法華経の金言です。

その心掛けが、また物質の施しともなりまして、お互いの親密さが増して、家の中も世の中も楽しいものになります。

法華経を信じ合う人々は、生き仏さまを讃歎して現在直ちに善い果報を得ましょう。

|| 続・現代生活の指針 ||

「供養讃歎の者」とは、物や言葉を施し、周りの人を喜ばせてゆく人のことを言います。

相手が誰であれ、いい所をほめ、喜ばせてゆくことは大事なことです。ところが困ったことに人間は、いい所より悪い所の方が先に目につくものですから、すぐ怒ってしまいます。いい所を見るのはむづかしいかも知れませんが、悪い所を見て怒るのはやめにして、お互いにいい所をほめ合うようにしてゆきたいものがあります。

ほめるのは、その時すぐがいいと思いま

す。何日も後になつて、あの時いいことしたね」と言つても、相手は覚えていてるかどうかわかりませんし、今さらそんなこと言われても、ということになりかねません。

ほめてもらうのはありがたいことですし、嬉しいものです。子どもの頃はちよつといふことがあればすぐほめてもらえましたが、大人になつた今、なかなかほめてもらえません。寂しいことです。

人間は、いくつになつてもほめてもらいたいと思つてゐるのです。大げさに言つて、ほめてもらうために生きてゐると言つていいでしょう。御前様は、ほめる所が何もなほめてあげなさい」とおっしゃつてみえました。

終戦直後、戦災で家も親・兄弟もなくし、一人で生きてゆかなければならなくなつた子どもがたくさん、名古屋駅など人の集まる所にたむろしてゐました。そういう子どもたちを駒方寮に連れて来て面倒を見られました。毎日毎日泥棒の真似事でもしなければ食べ物にありつけなかつた子どもの心は荒み切つてゐました。大人に対しても大きな不信心を持つてゐました。御前様はそういう子の「お父さん」になつて、子どもの心を癒すため、ほめることを第一の手段として養育に当たつてこられました。

一人、とても横着で保母さんを困らせてばかりの「悪い子」がいました。ある日、寮に行かれた御前様に保母さんが、この子にお仕置きをして下さい。ほとほと手を焼

いております。と言つて来ました。御前様はその子の目をじつと見つめ、そうかそうか、君はそんなに悪い子か」と頭をなでながら、ほうきを持って来てくれないか」と言われました。しぶしぶその子が持つて来ると、庭の落ち葉の掃除を始められました。そして、君も少し手伝つてくれないか」と言われました。子どもはいいやながらやり始めました。それを見てもすかさず、おう、上手じゃないか。君のことを悪い子だと言つが、どうしてどうして掃除のうまい、いい子じゃないか」とほめたのです。そんなことが何回か繰り返される内、ほめられたことが嬉しかったのでしよう、すっかり落ち着いていい子になったということです。伝説のように伝えられることです。

が、実際にあつたお話です。その他にも子どもの心を癒すためいろいろなことをされましたが、物のない時代には、言葉でほめると同時に、何か物をあげて喜ばせることも大事なことでした。今もう七十歳くらいの人ですが、その昔、寮で歌を歌つていたらお父さんの御前様が、上手だなあ、ごほうびにあげよう」とカンパンを下さつたそうです。あの時は本当に嬉しくて、今も忘れられません」となつかしそくに話されました。ささやかな物ですが、終戦直後はおやつなど皆無と言つてい時代でしたから、本当に嬉しかったのでしよう。なかなか出来ることではありませんが、御前様はそうしたことが本能的に、たくみに出来たお方でした。

〃お互いに長所をほめ合うことは一番大切な供養です。直ちによい報いがくるといのが法華經の金言です〃

人を喜ばせるとどんないいことがあるのかということとは、誰もが強い関心を持つことと思えますが、それについては〃そういうことをしたその時、すでに功德がもらえているのだからそれ以上考えなくていい〃と考えてゆくことが大事です。

タイなど南方仏教にその端的な例が見られます。お坊さんは托鉢をして食べ物を取ります。お釈迦さまの時代からそうされて来たことです。毎朝鉢を持って町に行き、町の人から食べ物を取られます。それをお寺に持ち帰り、みんなで分け合つて食べるのですが、頂かれた時、一切お礼を言いま

せん。日本の風習からすれば奇異な感じを受けますが、この奥には〃布施をした人はその瞬間に徳がもらえているのだから、改めてお礼を言う必要はない。却つてお礼を言つたらその時点で功德は消えてしまうのだからよくない〃という考え方があつてす。

施しは、施しが出来たこと自体がありがたいのです。人を喜ばせることが出来たそのこと自体がいいことなのだから、そこですべて完結し、それ以上のことを考える必要はないのです。

人と人との関係は、お互いに施し合いが出来ている間はうまくゆきますが、誰か一人が自分だけのことを考えたり、オレガ〃という心を持ち始めたら、ギクシャクして

来ます。お互いが、言葉で心で行かないで施し合うこと、家の中で言えばお父さんはお父さんでちゃんと会社に行き、お母さんはお母さんで家事をきちんとし、子どもは子どもで元気に学校に行くといったことです。これが家族間の施し合いとなるのです。特別なことはしなくても、普通のことを普通にしていれば相手は安心できます。安心を与えるのは「無畏施」の実行です。人間関係の一番の基本は、普通のことを普通にしてお互いが安心できるようにすることです。それが大きな徳積みにつながるのです。見返りを求める必要は一切ありません。

法華経を信じ合う人々は、生き仏さまを讃歎して現在直ちに善い果報を得ましょう。

生き仏なんてどこにいる？ などと言ってはいけません。私共が皆「仏さま」なのです。法華経は、どんな人でも仏さまの魂を持っていると説くのです。

今、欲令衆の写経をしております。欲令衆に説かれるのがそのことです。すべての人が仏に成れますよと、手を変え品を変え、説かれています。

私もあの人も仏さまとなると、お互いにもう少し大事にし合わなければと、いうことになると思います。何というくだらない人間だと思つと、悪口を言つたり意地悪をしたりということになります。仏さまとなるとそんなわけにはゆきません。同時に、自分自身にも自信ができてくると思っています。

どうしても私共は自分と人とを比べて、顔がどうか能力がどうか言い、自分が勝つていれればいいけれど、そうでない場合には、ガクツと落ち込んでしまいます。

人は誰も仏さまなので、他人と比べ合う必要は全くありません。この私がかくさんいれば別ですが、私という人間は世界中にたった一人しかいないのです。これ以上尊いものはありません。私なんかいてもいなくても……という人が時々いますが、そんなことを考えてはいけません。自信を持って生きてゆけばいいのです。人を怒らせ悲しませると、相手も悲しいけれど自分も悲しくなります。人を喜ばせてゆけば自分も嬉しい気持ちになり、自然に、ありがたいという心が起きてきて、

幸せな気分になれます。是非そうしてゆきたいものだと思います。

――施し合いが必要なわけ――

お釈迦さまは、この世界は苦であるとおっしゃいました。

「苦」の元の意味は「苦しい」ということでもあります。思うようにならないということでもあります。それを漢字一字で表わすとこの字しかないということで「苦」とされてきたのです。

こんなお話があります。大昔、アラビアの王様が国中の学者を集めて、人生は一体どういうものか、本に書いて教えてくれと命じました。するとみんながいろいろなことを書き、百冊の本ができました。しか

し王様が、とても読み切れないからもつと簡単に、と、十冊にまとめられました。これでもまだ多い、と言うと今度は一冊にして来ました。しかしその一冊が、とても分厚いので、とても読めない。一言で言うとうなる、と聞かれました。そうしたら代表の人が、人は生まれて悩み、苦しんで死んでゆく、と答えたということ。お釈迦さまのおっしゃる「四苦八苦」と同じことです。

「四苦八苦」とは「生・老・病・死」の四苦に「愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦」を合わせた八つの苦しみです。この苦は、あの人にはあるけど私にはない、とか、私にはあるけどあの人にはない、というものではありません。すべての人にある

り、誰も逃れることはできません。

「生」＝生まれて来て、その状態ですべて満足しているという人は少ないと思います。自分で作って生まれて来るのなら、もう少しましな人間に生まれて来るのだけれど、大なり小なり不満を持っていると思います。

「老」＝人間は生まれた以上、年を取ってゆきます。成長するという面ではいいことですが、年を重ねるごとに時間という因縁によって体が言うことをきかなくなり、思いうようにならないことが多くなります。

「病」＝病気になるのはいやなことですが、生きている以上、誰でも病気になる。死」＝最後はみんな死んでゆきます。ど

んなに偉い人でも逃れることはできません。

次の四苦の第一は「愛別離苦」です。親子・兄弟・夫婦、どんなに愛し合っていてもいつか必ず、別れの時が来ます。

「怨憎会苦」＝いやな人と会わなければならぬ苦です。初めは好き合って結婚したのに、途中で顔を見るのもいやになりながら、どうしても一緒にいなければならぬという因縁もあります。

「求不得苦」＝欲しい物を手に入れられない苦しみです。その物が高くて手が届かないということもあります。手に入ってもまた別の物が欲しくなります。満足がないのです。

最後は「五陰盛苦」です。見たり聞いた

り味わったりという感覚が盛んであるがために、もつともつとという欲のやむことがありません。

以上の八つの苦しみが誰にもあります。

人間は、そういう苦しみを持ちながら思うようにならない悲しい生きものなのです。ですから、みんなが助け合い、喜ばせ合ってゆきましよう、と教えられますのです。

思うようにならない苦しみの世界に一人突き放されてしまうと、心が狭くなってどうしていいかわからなくなってしまいます。そうならないために、みんなが「供養讃歎の者」となって、周りの人を力づけてゆきたいものであります。